

旭山動物園マイスター制度（仮称）
提言書

平成 17 年 12 月 8 日

社団法人 旭川青年会議所

目次	
1. はじめに	P2
2. 旭山動物園マイスター制度の概要	P5
3. 旭山動物園マイスター制度の設立	
および運営にむけての行政への要望事項	P7
4. マイスター制度による効果と将来展望	P8
5. まとめ	P9
6. 終わりに	P10

1. はじめに

三位一体の改革や地方分権型社会の構築へ向けた急速なうねりが、行政によってもたらされる“まちづくり”から、市民自らが主体となって、まちのあるべき姿を考え、その実現に向かって必要な、社会の仕組みやルールづくりそのものも市民自らの意思で積極的に進めていく“まちづくり”への変革を求めている。

一方、旭川市は「市民参加推進条例」（平成15年4月1日施行）によって市民の主体的行動に基づく“まちづくり”を制度として保障した。

とするならば、“まちづくり”を取り巻くこの環境の変化や推進条例のもとで、本来旭川市民は、例えば要望や意見を単に行政に投げかけるのみならず、その実現に向けた取り組みに自ら積極的に参画するなど、“まちづくり”の過程を行政と協働して、魅力ある旭川の“まちづくり”を目指すべき時と考える。

社団法人旭川青年会議所（以下、旭川JC）は、そうした動きを捉えた中で平成12年には「次代を担う子どもたちの育成」「自身の生活の基盤である企業活動への貢献」「地域社会を支える住民参画システムの構築」という3本の運動指針を掲げた。このうちの「地域社会を支える住民参画システムの構築」の具現化に向けた様々な“まちづくり”の取り組みを推進してきている。

そしていま私たち旭川JCが着目したのは、全国の脚光を浴び、まさしく日本を代表する施設として遠く海外からも大勢の観光客が訪れるまでになっており、そのことで市民共通の関心事にもなった旭山動物園である。

一見すれば成功事例としての側面ばかりが目につくものの、かつて、来園者数が減少の一途をたどり、現実に閉園の危機に直面した旭山動物園。その危機を乗り越え、年間160万人以上の来園者であふれかえるまでに動物園を変えたのは、ほかならぬ動物園職員の旭山存続に向けた寝食を忘れた取り組みと、その職員の想いを受け止め支え続けた市民の存在だった。

その動物園が、皮肉なことにこの急激な入場者数の増加に伴い新たな問題点を抱えている状況にある。

「市内近郊はもとより日本全国各地から、せっかくいらして頂いた皆さんに、
もっと動物園を楽しんでもらいたい」

そのために今、動物園のスタッフ不足を補う何らかの力が必要である。ならばもう一度、あの危機を乗り越えた“市民の力”で、その動物園が抱える課題を解決できないか？

ここにこそ、とりわけ市民の参画を促すいわば“仕組み”を構築することで“まちづくり”の課題解決に取り組んできた旭川JCが関わるべきと考えた。

旭山動物園の現状の課題を分析してみると、行政の力だけでは解決へ向けた取り組みにどうしても限界が出てきてしまう点が多いと考えられる。

現在、動物園が抱える主たる課題はマンパワーの不足である。仮にそのマンパワーを行政が確保しようとするならば、大量の動物園職員を雇用するか、あるいは配置換えを

行わなければならないが、実際にはそれも困難である。

旭山動物園における課題を「だれが」「いつ」「どのようにして」解決すべきなのだろうか？一部の市民やボランティア団体のみの活動や、或いは行政のみでは解決は困難なものになる。だからこそ多くの市民が動物園にかかわることが、大きな成果を生むきっかけとなるはずである。

「奉仕の精神」「社会貢献」「誇り」といったものが得られるボランティア活動や市民サポートという形でのかわりはもちろんのこと、「参加しやすい一方でスキルアップにも挑戦できること」「年齢や性別を問わない」「資格認定という形での社会的評価が高い」「活動の選択肢が多い」というようなことが盛り込まれた仕組みが作られたなら、更なる市民の参加がこれまで以上に期待されるであろう。

社会状況の変化、時代の潮流

- ・三位一体の改革
- ・地方分権

旭川市の状況

- ・「市民参加推進条例」において、市民による主体的な“まちづくり”を保障
- ・旭山動物園の入場者数が日本一となり、全国の脚光を浴びている

しかし

動物園における課題

- ・動物園のスタッフ不足を補う力が必要
- ・一過性のブームが去り、いずれ下火となってしまうかという不安感、危機感
- ・市の財政事情から、更なる発展が困難となる可能性

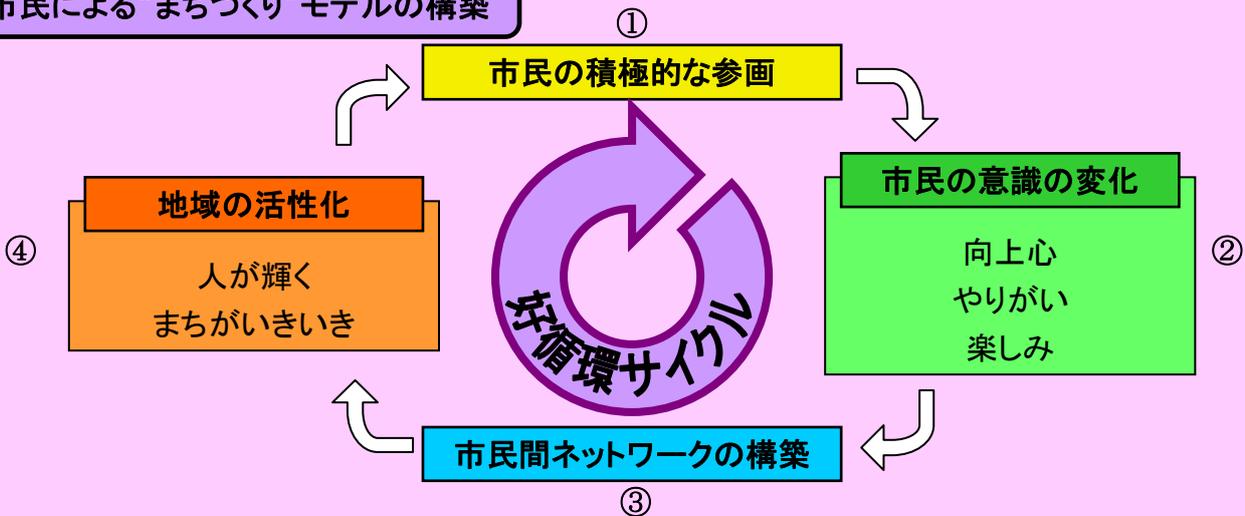
旭川 JC

運動指針の一つ:住民参画システムの構築

- Step 1 市民参画の土壌の形成
- Step 2 市民活動のリーダーの発掘
- Step 3 リーダー主導の活動

マイスター制度

市民による“まちづくり”モデルの構築



動物園の課題を解決

- ・マイスター認定者の活動による園内スタッフの補助
- ・市民の輝く姿が来園者に感動を提供し、安定したリピーターの増加
- ・市民サポートによる経費の削減

将来への発展性

- ・生涯学習社会の構築
- ・青少年育成事業への活用
- ・旭川の他の潜在的資産へも、同様の取り組みが活用
- ・動物園の更なる発展から波及する経済効果

etc

2. マイスター制度の概要

マイスター制度の特徴

従来のボランティア活動の奉仕や社会貢献の精神に加えて、
本制度は以下の要素を備えている

幅広い層へ *Wide range*

- 青少年●
 - ・動物生態についての学習などから“いのち”の大切さを知る
 - ・園内でのサポート活動を通じて実社会を知る
- 高齢者●
 - ・生涯学習を通しての“やりがい”や“いきがい”
 - ・豊富な経験・知識・技術を社会に還元する

多種多様な分野 *Variation*

- 動物生態分野●
- インフォメーションガイド分野●
- 環境美化分野●
- 介護福祉分野●
- 文化活動分野●
美術・写真・氷彫刻など

やりがい 誇り
充実感 達成感
喜び 楽しみ
向上心 挑戦心

難易度の選択 *Selectable*

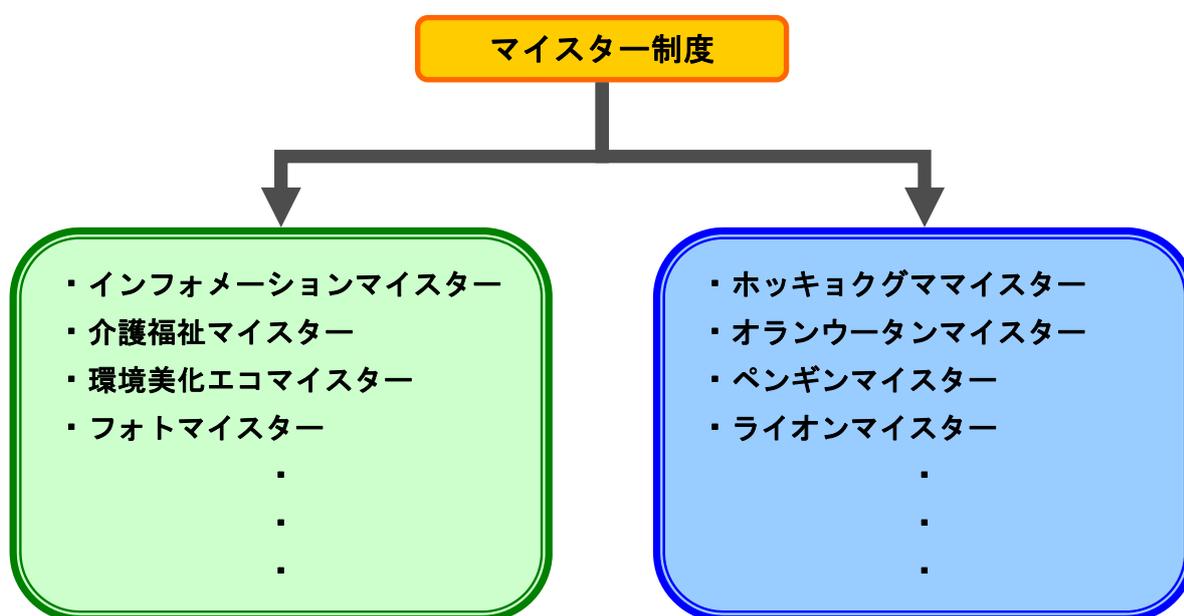
- 気軽に参加できる
- より上位の階級へトライし
スキルアップを図れる

社会的評価 *Status*

- 資格認定●
マイスターという称号が得られる
- 高い認知度●
広く市民に認知されることで
尊敬や憧れの対象となる

本提言書における動物園マイスター制度が優れている点は、従来のボランティア活動にある奉仕や社会貢献の精神というものに加えて、幅広い層の市民を受け入れることができ、多種多様な選択肢が用意され、さらに誰もが気軽に参画できる一方でより高いレベルを目指そうとするものにも開かれた制度であるということである。そしてさらに、この制度が市民に広く認知されることで、高い社会的評価を受けることになる。これらを通じて市民一人ひとりが、やりがいや誇り、充実感や達成感、楽しみや喜びなどを享受することができる。

マイスター制度の具体的な内容としては、インフォメーション・介護福祉・環境美化などのサポートグループ、ホッキョクグマ・ライオン・ペンギンなどの動物ガイドグループに大きく分けられる。



このマイスター制度の詳細については、添付資料「旭山動物園マイスター制度（仮称）企画書」に示すこととする。

3. マイスター制度の設立および運営にむけての行政への要望事項

本制度の実施主体は、あくまで市民もしくは市民団体であることは言うまでもないが、行政から支援を得ることや行政と協働で取り組めることは様々あり、このことが本制度の着実かつ速やかな実現にむけて極めて重要な要素であるものとする。

マイスター制度の設立および運営に向けての行政に対する要望事項は、下表に示すように、おおきく市民参画への機運の向上に関するものと活動環境の整備に関するものとに分けて示すことができる。

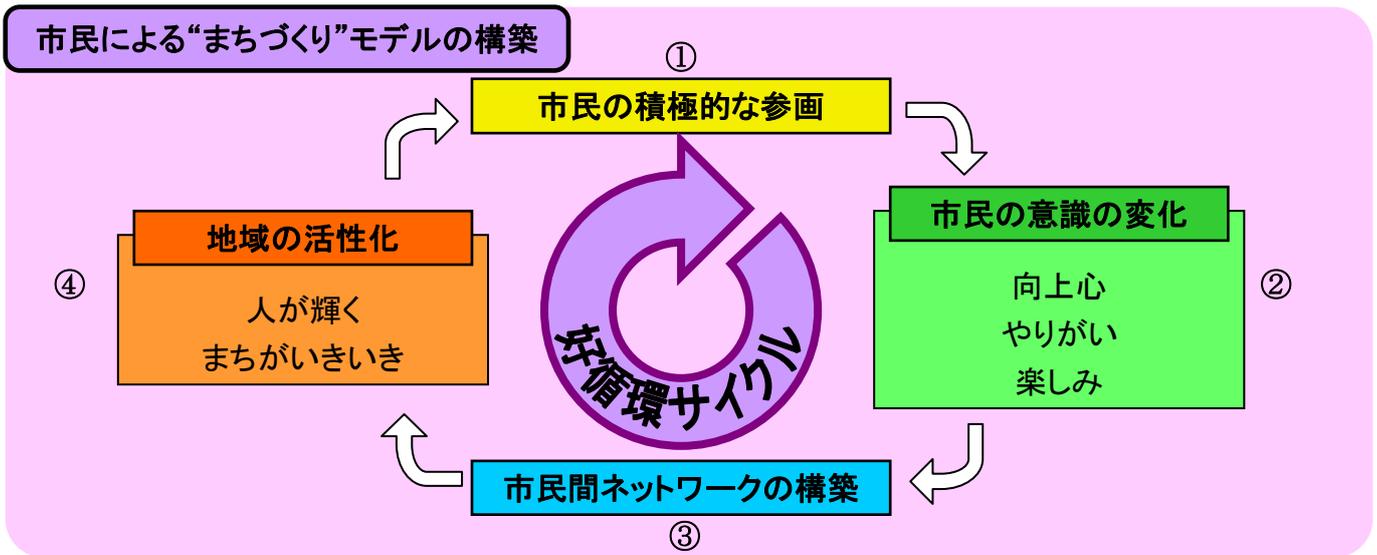
項 目	具体的な要望事項
市民参画への機運の向上	本制度自体の認定
	マイスター登録者の認定
	本制度に関する功労者への褒章 (運営側、マイスター登録者等)
	本制度の普及啓発 (以下に例を示す) ・生涯学習や青少年教育としての活用を促進 ・マイスター認定者の雇用機会を促進
活動環境の整備	本制度にかかわる情報の収集と発信
	各種団体間の仲介・連携補助
	活動拠点の整備・提供 (動物園内、その他施設等)
	人的・物的・金銭的な助成・補助

また本制度の実現への過程において、規制緩和の必要性など制度運営の障壁となる事柄が発生した場合においては、その対処に向けて行政と本運営組織がともに取り組めるような、柔軟かつ迅速な行政の対応についても要望するものとする。

4. マイスター制度による効果と将来展望

(1) 市民による“まちづくり”モデルの構築

本制度によって、市民が自主的かつ積極的に動物園に関わる機会が生まれ、マイスターとしての活動を通じて、やりがいや自らの資質向上への意欲など市民の意識に変化をもたらす。さらには、“まちづくり”を担う人材が育成されるとともに各分野のリーダーが発掘され、同じ志を持ったマイスター同士のつながりから新たな市民間ネットワークも構築される。こうした“ひと”と“まち”がいきいきと輝くことが、さらに多くの市民を惹きつけて本制度への参画を促進させる好循環が実現する。



(2) 動物園の課題を解決

本制度を通じて、現在、人手が不足しているといわれる動物園内でのガイド業務を手助けすることができるようになり、来園者に対するホスピタリティも向上する。そして、このような活動をほかでもない市民が、しかもいきいきと行なっている姿を見せることで、来園者に感動を提供し、安定したリピーターの増加をもたらす。また、清掃、施設補修などの業務も市民がサポートすることで、動物園における経費の削減にもつながる。

動物園の課題を解決

- ・マイスター認定者の活動による園内スタッフの補助
- ・市民の輝く姿が来園者に感動を提供し、安定したリピーターの増加
- ・市民サポートによる経費の削減

(3) 将来の展望

この制度が市民に広く認知され、高い社会的評価を受けることで、マイスターに憧れる市民が増え、更なる制度の充実と発展が期待できる。

また、高齢者の生涯学習の場や青少年の育成事業の場への活用によって、心身ともに健全かつ豊かな生活をおくれる市民が増えていくことにもなる。

さらには、動物園以外にも本制度と同じような市民の関わりによって、再び輝きを取り戻すような旭川の貴重な財産に対して、この制度を通じて構築された新たな市民ネットワークの力が作用すれば、更なる可能性を引出すことが期待される。

これらのことが、ひいては経済的な面も含めた地域の発展につながるものとする。

将来への発展性

- ・生涯学習社会の構築
- ・青少年育成事業への活用
- ・旭川の他の潜在的資産へも、同様の取り組みが活用
- ・動物園の更なる発展から波及する経済効果

etc

5. まとめ

かつて入場者数は減少の一途をたどり閉園の危機にあったこともある旭山動物園だが、その危機を乗り越え今や来園者であふれかえるまでに変貌を遂げた。その過程には市民の声が大きな原動力になったことはまぎれもないことである。

しかし、今現在のブームとも言える状況が過ぎ去り、いつまた危機的な状況が来ないとも限らない。だからこそ地域に住む住民一人ひとりが“まちづくり”の主役であるという意識を持ち、本当の意味での市民が誇れる動物園を目指す必要がある。

また一方で、これまで市民活動の重要性は認識しているものの、きっかけや具体的な参加の仕方、的確な情報の発信がなされなかったために、参加の機会を逸してきたという事実もある。

そこで我々が提言するマイスター制度は、「子どもたちの育成に役立つ」、「シニア世代の生涯学習の場となる」、「動物園を通して地域に誇りをもてる」、「参加者自身の資質の向上につながる」ものであり、かつ地域の活性化への可能性を大いに含み、旭川市民の力を存分に発揮できるような優れた制度である。この制度を実現することが、市民参加型の動物園運営を可能とし、住民参画型社会の実現へとつながるものとする。

6. 終わりに

いつの日か、旭川の財産となって

ついこの間まで、北海道旭川市は単なる地方都市であった。しかし今も地方都市であることに変わりはないが、このところ日本を席卷している話題の施設「旭川市旭山動物園」によって、幾分変化してきている。単に来園者数が日本一になったことだけでなく、動物展示方法の面でも他の施設が取り入れようとするほど有名になった。そして最近、よく耳にすることがある。それは旭川の人が他の地方に行ったとき郷土について話す機会があって、その時「あまりにも旭山動物園のことを知らない自分に気付く」というのである。郷土の誇り旭山動物園は本当だろうか？他の方から見ると確かにそのように見えるのだろうが、果たしてわたくし達はどれほどの旭川を知っているのだろうか？「あさひかわって、どんなところですか」「あさひかわには何があるの」そう聞かれた時、わたくし達は胸を張って、愛する郷土を話さなければならないと思う。

「旭川はね、沢山川が流れていてね、冬は寒くて、でも意外に夏は暑くて…」

「旭川はね、旭山動物園があってね、そこでは市民がね、園を支えていてね…」

「旭川はね、盆地だから穏やかな気候でね、だから人も穏やかでね…」

ここに旭山動物園マイスター制度がある。その精神は旭川に対する郷土愛を育むための制度である。毎年、この制度を受けて多くの人が動物園マイスターとして誕生する。もしこの制度が旭川全域で展開されたとすると、大勢の旭川のマイスターが誕生して、郷土に対する活動をするであろう。例えとして、中学校の学習課程に部門を問わず、一つ以上のマイスターを取得することを組み入れたとする。中学校時代にマイスターを取得した子供たちは成長して、やがて進学や就職をする。北海道を離れ、全国へ散らばっていくことであろう。その時必ず、「あさひかわって、どんなところですか」「あさひかわには何があるの」という瞬間がある。

「旭山動物園はね、行動展示って方法で動物を展示していてね…」

「旭山動物園はね、市民が関わる部分が多くて、市民が運営にね…」

「旭山動物園はね、来た人にマイスターが命の輝きを伝えてね…」

もし、このような教育課程への組み入れがあれば、毎年何千人ものマイスターが生まれ、日本国中に散っていくわけである。そこで話される旭川は、聞くものにとってすばらしい郷土愛に満ちた街として映るだろう。その波が何年もの間繰り返される事で、10年或いは20年たったとき想像もできないほどの大きな波としてわたくし達に返ってくるはずである。もし旭山動物園に留まらず各所で、このマイスター制度が走り始めたら、さらに大きな波が帰ってくることになる。

いつの日か、旭川の財産となって。